

第50回 佐賀県作業療法士会

『精神科領域の地域支援

～行政と医療現場の現場と課題～』

に参加して

医療法人 山のサナーレ・クリニック

大村 侑子

これまでの数年間、私は入院中の方を対象とした精神科作業療法に携わり、現在は福祉サービス事業所の立ち上げに動いております。いわば私自身が地域移行の状態、様々な福祉サービスや法制度・地域での生活のあり方・働き方について理解を深めていっている最中です。‘もっと早くから福祉サービスの仕組みや法制度・地域資源を理解していたら、入院中の方へより柔軟なそして幅広い支援ができていたのではないか’ということを思っていた時に本研修会の開催を知り、飛びつくように参加しました。

日本では精神障害者が地域社会に参加しにくい歴史があるように感じます。日本の精神病床の平均在院日数は他の先進国と比べて3倍以上も多いという行政の方の話もそれを裏付けているようでした。精神科に長期入院している方の中には、家族と疎遠になったり住む家がなくなり退院は無理とあきらめている方、入院が長期になるほど社会と関わる機会が減り社会性が低下し入院が長引く方など、夢や希望・自信を失った状態の方々が数多くいます。

今回の研修では法制度の具体的内容や地域をフィールドとして働く作業療法士の取り組みやケースを知ることができ、対象者の地域生活を考えていくための視野を広げることができました。‘適切な時期に、適切な支援が受けられなかったり、適した受け皿を提供されず、退院のチャンスを逃した方’が自分の人生に夢や希望を持ち、いち地域の生活者として主体的に生きることを支援できるのは作業療法士だ、と私は思っています。そのためには入院中の対象者に関わる作業療法士自身がまず地域への関心を強く持って、制度を活用したり対象者と地域をつなぐ柔軟な動きと行動化が必要だと再認識しました。その事が多くの作業療法士にも伝わるといいなと思います。今回のような研修会を県内各地で開催されることを期待します。

今後さらに制度的にも障害者の地域移行が重要視されていますし、人々の多様な生き方が尊重される時代になってきています。さらに障害者だけでなく社会の人々が互いのつながりの大切さや豊かな暮らしのあり方について再認識し始めています。新たな地域社会が形成されてゆくその時に、いかに精神障害者もあたりまえに生活している地域となるのか。やる気がみなぎってくる研修会でもありました。